

となの雄と雌間の先行・追隨。

(2) 親和的接近・接触交渉の場面：個体どうしが寄り添ったりグルーミングをする前後の先行・追隨。

(3) 母子間の交渉場面：母とその赤ん坊の間の先行・追隨。

(4) こども同士の遊びの場面：とっくみ合いや追いかけ合い等の遊びの中での先行・追隨。

(5) 抗争的・反発的交渉の場面：逃げる個体を追いかける・けんかの現場に集まる・緊張が高まった場合に優位の個体の周囲に集まる。

その結果、以上の先行・追隨は、群れが移動する際に周囲の諸個体の移動に反応してついていくという先行・追隨とは本来全く異質な動機に基づく行動で、それぞれは異なる範疇に属する行動でありながら、群れ内の個体間関係の調整に微妙に作用し彼らの日常の個体間関係の形成と維持に深く関わるものとして、群れ移動の先行・追隨と統一的に理解する必要があるとの結論に達した。また、この結論は、これらの行動を社会的伝達として、その個体発生の過程を明らかにする研究につなげられるべきものと考えられる。

志賀高原横湯川流域における植物の分布と現存量および生産量

小見山章(岐大・農)・和田一雄*(京大・霊長研)

*共同実験者

リタートラップ法を用いてサルが摂食できる果実の生産量を推定した。1985年8月下旬に志賀高原横湯川流域の通称文六・オカメノヒラ・地獄谷・水道二又の5ステーションで53個のトラップ(開口部面積1m²)を設置した。当初、9月下旬、10月下旬、11月下旬の3回で落果を回収する予定であったが、積雪状況により9月下旬と11月上旬の2回となった。回収した果実はトラップ毎にまとめて紙袋に入れ、乾燥機で絶乾にした。トラップ毎の落果重量および種別の個数を記録した。

落果量はミズナラ林で34.76 kg/ha(9月), 305.3 kg/ha(10-11月), ブナ林で9.981 kg/ha(9月), 20.49 kg/ha(10-11月), 湿性林で86.29 kg/ha(9月), 44.60 kg/ha(10-11月)となった。

落果の種類はミズナラ林でミズナラ・カンバ類・ミズキ・カエデ類・ヤマウルシ・サワグルミがみられた。ブナ林ではブナの殻斗(前年のもの)・ミズナラ・カンバ類・カエデ類・ツノハシバミ・ヤマウルシ・ミズキ・サワグルミがみられた。湿性林ではミズキ・ヤマハシバミ・カンバ類・カエデ類・ヤマノイモ・ヤマウルシ・ツリバナがみられた。

ミズナラとカンバ類でやや結実をみたものの、ブナはほとんど結実せず、ミズキの落果も比較的少なかった。サルナシやヤマブドウなどツル性植物も調査地周辺では結実をみなかった。1985年度の結実状態は並作以下であったといえよう。

志賀A1群(餌付け群)とA2群(自然群)の群間比較

長谷川寿一(東大・教養)

長野県山の内町地獄谷野猿公苑で餌付けされている志賀A1群、およびその分裂群で山中を遊動しているA2群を対象に野外調査を行った。A1群は年間を通し野猿公苑に出席し、常田英士氏をはじめとする管理者や他の調査者によって詳しい観察がなされているため、本研究では近年情報の少ないA2群に調査の重点をおいた。しかしながら、1985年5月、7月、1986年1月の各約5日間ずつの調査では、食跡、足跡は見られたものの、A2群を直接観察することはできなかった。短期間の調査で遊動域の地形に不慣れだったことに加え、3個体に装着されていたテレメーター発信器が故障し、花火による追い上げを行っている結果サルが調査者を警戒するようになったという諸条件が重なったため十分な成果はえられなかった。断片的・間接的資料からは、1) A2群は通年では標高650-1400mの地域を利用するが、降雪期には1000m以上はほとんど遊動しない、2) 雪上の足跡は50-60頭分カウントされ(このほかに母親に運ばれるアカンボウが数頭いたであろう)、グループサイズは1979年の分裂時-60頭-とほぼ同程度である、と推察された。今後A2群については、個体名を確認しつつ個体群動態の資料を蓄積し、遊動・採食生態に関するデータを収集していきたい。

A1群の性年令構成は、1986年2月の時点で、

オトナ(6歳以上)が♂15頭♀48頭、5歳♂1頭♀6頭、4歳♂7頭♀7頭、3歳♂12頭♀4頭、2歳♂6頭♀14頭、1歳♂12頭♀6頭、0歳♂14頭♀16頭の計158頭であった。またA1群の周辺に頻りに姿を現わすは約15頭いた。1979年の分裂時の個体数は90頭であり、A1群は年8%程度ずつ総数が増加している。このままのペースで増加が続けば、数年のうちに再分裂が起こることは必至であろう。志賀A群は25年間以上にわたって個体識別に基づく詳細な人口学的資料の累積がなされている全国でも屈指の貴重な群れであるので、早急に今後の管理計画を案出することが望まれる。

なお2月下旬に、合同調査団(筆者を含む10名)がA1群の56頭を一時捕獲し、生体計測・採血等の総合調査を行ったことを付記する。

課題 2

交尾期におけるヤクザルオスの群間移動・移入・移出

* 竹門直比・David S. Sprague(京大・理)

*旧姓 岡安

ニホンザルの野外研究は、主に餌付けされた孤立群において行われてきた。しかし、本来ニホンザルの群れは、他の群れと遊動域を接し、出合いの機会も多かったはずである。この他群との接触は、特に群れを移籍するオスにとって重要な社会的場面を作り出していたに違いない。本研究は、オスの移動が、多数群が存在する中でどのように行われているかを明らかにする目的で行われた。

屋久島の低地林には、ニホンザルの群れが遊動域を重複しながら、多数分布している。非交尾期の各群れの性比は約0.9で、離れオスも殆ど見なかったことから、オスの大部分が群れ内で生活していると考えられる。これが交尾期になると、調査対象の3群周辺に、識別されただけでも20~40頭('84・'85)の群れ外オスが出現し、活発に群間移動していることが示唆される。

群れ外オスの出現数を、対象群の1つM群について日別に見てみる。'84年秋は、10月下旬と12月初に増加し、顔ぶれも変化している。発情メスは10月下旬には、オトナメス8頭中5~6頭と急増している。12月初旬にはやや減少し(3頭)、代わっ

て隣りのH群の発情メスが7頭中3~4頭に増加している。この時は、M群に出現していたオスがH群で見られたり、M群の群れオスがH群を訪問したりしている。'85秋については、交尾期は前年ほど活発でなく、9・10月は発情メスは各群1~2頭、群れ外オスも0~1頭であった。11月中には発情メスは3~5頭に増加し、群れ外オスも複数出現した。12月にはいると交尾期はほぼ終了し、オスの移動もなくなってしまった。

以上の変化をみると、オスの群間移動のきっかけは、隣接群の発情メスの増加が重要と考えられる。発情メスは大胆で声も目立つし、一度に6頭も発情すると相手が不足し、群れから離れた発情メスが他群のオスの誘因になっていることは、充分に考えられる。

屋久島上部域にすむヤクザルの生態学的研究

好広真一(龍谷大・経営)、山極寿一、大竹 勝(日本モンキーセンター)、増井憲一(京大・理)

課題 3

本年度は採択なし。

課題 4

黒部川流域におけるニホンザル自然群の分布

赤座久明(大沢野中学校)、加藤 満(高蔵寺高校)

黒部川流域で、ニホンザルの分布調査を行った。調査の目的は、(1) 黒部川源流域のニホンザルの生息状況を現地調査し、群れの分布限界域を明らかにする、(2) 黒部川下流域で過去5年間継続して観察している17群についてのセンサスと遊動域の調査、の2点である。

(1)の調査結果

85年7月から10月にかけて、延べ24日間の調査を行った。調査地域は黒部川の源流地域で黒部川